

『承久記』の三浦胤義

松林靖明

一

『承久記』に相模国の豪族、三浦一族の記述が多いのは、この承久の乱で三浦胤義が後鳥羽院の側（京方）に、兄の三浦義村が北条氏の側（鎌倉方）にそれぞれ味方して、兄弟が対峙するという、いわば登場する武士の中での主要人物達になっていることから当然のことであろう。しかし、貴族中心の『増鏡』や『神皇正統記』に三浦氏が記載されないのはやむをえないとしても、武士の歴史を描き、承久の乱の具体的な記述を持ちながら『神明鏡』『保曆間記』にも、三浦氏の記事は見出せない。そこで『承久記』の諸本のうち、最も古態を残す慈光寺本

『承久記』と後の改竄を経た前田家本『承久記』・流布本『承久記』などを比較して、どのような相違が見られるか、後鳥羽院の側について三浦胤義を中心に確認しておこう。まず慈光寺本では、北条義時追討を決意した後鳥羽院が公卿會議を開き、近衛基通や九条道家等を召し、その席上、卿二位の発言に名の出た藤原秀康が呼ばれ、義時討伐の方策を計らうよう命じられる。その秀康の返事は「駿河守義村が弟二、平判官胤義こそ、此程都ニ上テ候エ。胤義ニ此由申合テ、義時討ン事易候。」というものであり、義時追討の実行者としての武士の中で、最初に名の挙げられた人物として描かれる。

一方、前田家本は、義時に腹を立てた後鳥羽院が「内々仰合せられける人々」の中に、坊門忠信・按察光親等に混ざって初

めから「三浦平九郎胤義」の名があり、慈光寺本とは登場の仕方が異なっている。

さて、慈光寺本は、院の依頼を受けた能登守藤原秀康は三浦胤義を自邸に招き、酒盛りしながら、何故胤義が鎌倉を捨てて都にいるのかを尋ねる。胤義の返事は、

神妙也トヨ能登殿。胤義ハ先祖ノ三浦・鎌倉振捨テ都ニ上リ、十善ノ君ニ宮仕マヒラスルハ、心中ニ存事ノ候也。如何ト申セバ胤義ガ妻ヲバ誰トカ思食。鎌倉一トクヤリシ一法執行ガ娘ゾカシ。故左衛門督殿ノ御台所ニ参テ候シガ、若君一人出来サセ給テ候キ。督殿ハ、遠江守時政ニ失ハレサセ給ヌ。若君ハ其子ノ權大夫義時ニ害セラレサセ給ヌ。胤義契ヲ結テ後、日夜ニ袖ヲ絞ルムザンニ候。「男子ノ身也セバ、深山ニ遁世シテ念仏申メレ。後生ヲモ弔マヒラスベキニ、女人ノ身ノ口惜サヨ」ト申シテ、流涙ヲ見ニ付テモ、萬ツ哀ニ候也。三千大世界ノ中ニ、黄金ヲ積テ候共、命ニカヘバ物ナラジ。勝テ惜キハ人命也。ワリナキ宿世ニ逢ヌレバ、惜命モ惜カラズ。去バ胤義ガ都ニ上テ、院ニ召サレテマイリ、謀反起、鎌倉ニ向テヨキ矢一射テ、夫妻ノ心ヲ慰メバヤト思ツルニ、加様ニ院宣ヲ蒙コソ面目ニ候ヘ。胤義ガ兄駿河守義村ガ許へ、文ヲダニ一下ツル物ナラバ、

義時打取ランニ易候。其状ニ、「胤義ガ都ニ上リテ、院ニ召レテ謀反ヲコシ、鎌倉ニ向テ好矢一射テ、今日ヨリ長ク鎌倉ヘコソ下リ候マジケレ。去バ昔ヨリ八ヶ国ノ大名・高家ハ、弓矢ニ付テ親子ノ奉公ヲ忘レヌ者ナレバ、權太夫ハ大勢ソロヘテ都へ上セテ、九重中ヲ七重八重ニ打卷テ、謀反ノ輩貴玉ハンスラン。駿河殿ハ權太夫ト一ニテ、三浦ニ九・七・五ニナル子共三人年、權太夫ノ前ニテ頸切失給ヘ。サヤウニ成ヌル物ナラバ、殿ト權太夫殿、中ハ隔心ナクシテ、諸国ノ武士ハ上トモ、殿ハ上ズシテ、三浦ノ人共勸仰セテ、權太夫ヲ打玉ヘ。打ツル物ナラバ、胤義モ三人ノ子供ニヲクレテ候ハン。其替ニ、殿ト胤義ト二人シテ、日本国ヲ知行セン」ト、文ヲダニ一下ツル者ナラバ、義時討ンニ易候。加様ノ事ハ延ヌレバ悪候。急ギ軍ノ僉議候ベシ、トゾ申タル。

引用がやや長くなったが、この胤義の言葉の中にかくつか三浦氏を知る手掛りが見受けられる。まず、胤義が後鳥羽院の誘いに乗ったのは、鎌倉即ち北条氏に対する恨みからであつて、彼の妻が「鎌倉一トク（ハカ）ヤリシ一法執行ガ娘」であつたと、またこの妻はかつて二代將軍頼家の妻であつて、頼家の子を儲けたが北条義時によつてその子が殺害されたこと、これ

らの点が北条氏に対する恨みとなつてゐることが分かる。そこで慈光寺本のこの記事を検証してみることにする。

最初に彼胤義の妻が、頼家の子を生んでゐるか否かを考えてみる。「尊卑分脈」には、頼家の子としては、「一萬丸」「公曉」「栄実」「禅暁」「女子」の五人が載つており、この内の「一萬丸」と「公曉」は「母比企判官藤原能貞女」、「栄実」「禅暁」の母は「昌実法橋女」、「女子」の母は「木曾義仲女」となつてゐる。この内、問題になるのは「栄実」「禅暁」の母「昌実法橋女」である。ところが、「吾妻鏡」に「昌実法橋」の名は見えない。一方、慈光寺本の「一法執行」という名は、「承久記」諸本によつて多少異同がある。前田家本には、「胤義が当時相具して候女は、故右大将殿の時、一法房と申ものゝ女也」と書かれ、流布本には、「当時、胤義が相具足して候者は、故大将殿の切者、意法坊生観が娘にて候」と記されてゐるのである。頼朝の時代に、切れ者としてもはやされた「一法(意法)房」とは、成勝寺執行で法橋の一品房昌寛に他ならないだろう。「吾妻鏡」に「昌寛」が登場するのは、治承五年五月二十三日の条が最初である。この日、鎌倉において小御所と殿の作事の奉行を勤めたというものであるが、昌寛はこの後も建久元年・建久六年にも、頼朝上洛のため、六波羅に新邸造営あるいは修

理の奉行として都入りをしてゐる。また、奥州平泉の藤原泰衡追討の宣旨を申し受ける使者としても文治五年には上洛してゐる。これらのことから、彼が頼朝時代にはかなり重用されてゐたと考えてよからう。

この一品房昌寛は、真名本「曾我物語」の中でも、「今夜、君の御ために眩き御示現を蒙りて候ふなり。君は足柄山矢倉が嶽に渡らせ給ひ候ひければ、伊保房は銀の瓶子を懐き、実近は御覺を敷き、盛綱は金の折敷に銀の御盃を据え、盛長は娘の銚子に御酒を入れ進せ候ひければ」と伊豆山に籠もる頼朝が、将来天下を取ることを予言したためたい夢の告げの中に、安達盛長らとともに出てきており、また「源平闘諍録」一上「藤九郎盛長夢物語」には、「一品坊昌寛観音品計教頼朝故号云一品坊也」と、その名の由来が記されてゐる。これら物語の中にも、拳兵当時の頼朝に早くから近仕していた様が伝えられてゐる。以上のことから、「承久記」諸本に見える、頼朝の時代に鎌倉一の威勢を誇つた切れ者という性格づけは、あながち間違ひとも言い切れず、この昌寛の娘が、二代将軍頼家の妻になる可能性はきわめて高かつたと考えられる。以上のことから「尊卑分脈」の「昌実」は「昌寛」の誤伝と見て差支えあるまい。

さて、慈光寺本「承久記」を始め他の異本も、頼家と一品房

昌寛の娘の間に「若君一人」が生まれたとしている。しかし実際は、昌寛の娘が生んだ頼家の子は二人いたらしい。それは「尊卑分脈」に載る栄実と禅暁であるが、栄実については「尊卑分脈」の注は、「若宮別当、童名千手丸、建保七十六自害」と記しているが、建保二年の誤りで、「吾妻鏡」の同年十一月二十五日の条に

六波羅の飛脚到着す。申して云はく、和田左衛門尉義盛・大学助義清等が余類洛陽に住し、故金吾将軍家の御息と頼師ナをもつて大將軍となし、叛逆を巧むの由その聞えあるによつて、去ぬる十三日、前大膳大夫の在京の家人等、件の旅亭北の辺を襲ふのところ、禪師たちまちに自害す。伴党また逃亡すと云々。²

と見え、また「愚管抄」六に、
其後又頼家ガ子ノ、葉上上人ガモトニ法師ニナリテアリケル十四ニナルケルガ、義盛ガ方ニ打モラサレタル者ノアツマリテ、一心ニテ此禪師ヲ取テ打出ントシケル又聞ヘテ、皆ウタレニケリ。十四ニナル禪師ノ自害イカメシクシテケリ。

と、禪師つまり栄実は、三浦氏にとつても極めて重大な意味をもつた、一族和田義盛の北条氏に対する反乱軍の残党に与して

討たれたものと伝えている。

次に弟の禅暁は、「尊卑分脈」に「仁、童名善哉、母同栄実、承久二四十一被誅了」とあるが、童名の善哉は実朝暗殺事件の下手人で腹違いの兄にあたる公暁の幼名であり、ならんかの誤伝であろう。禅暁の殺害は「吾妻鏡」には記されていないが、「承久記」の異本の一つ「承久兵乱記」には、

おなじき御腹にせんきやうとて、童名千歳殿とぞ申しけるは、承久二年四月十一日討たれ給へり。

とあり、また「仁和寺御日次記」の承久二年四月十四日の条には、

今夜、禅暁阿闍梨故印家、東山辺に於いて之を誅す。

とあつて、京において殺されている。

「承久記」諸本が「若君一人」とすることは、先に触れたとおりであるが、慈光寺本は「若君一人出来サセ給テ候キ。督殿ハ遠江守時政ニ失ハレサセ給ヌ。若君ハ其子ノ權太夫義時ニ害セラレサセ給ヌ。」と、「若君」がどのような理由によつて殺されたのかは記さず、前田家本は「若公一人儲ケ奉りしを、若公の禪師公の御謀反に同意しつらんとて、義時に誅せられけり。」と、禪師公（この場合は公暁を指す）の実朝暗殺に関与した疑いで殺されたとする。いづれにしても「若君一人」が、栄実の

ことか禅暁のことかは判然としない。しかし、禅暁の死については他にも考えるべき点があるので、さらに後に述べることにする。

二

三浦胤義が一品房昌寛の娘を妻に迎えたことを跡付ける確実な資料は見当らない。わずかに系図類に見えるものを挙げ得るにすぎない。「佐野本系図」所載の「三浦系図」が胤義の長男胤運の注に「太郎兵衛尉、父一所自殺、十八才、母意法坊昌寛法橋女初勲家」とし、次男兼義、三男義有も「母同上」と注記しているのが、管見に入ったものとしては唯一のものである。

また「諸家系図纂」所載の「三浦系図」の胤義の項には、「為頼朝御猶子也」とあって、どのような伝えによるものだろうか、他に見えない説を載せている。胤義が兄義村と違つて、結局北条氏に付かなかつたのは、頼朝・頼家・実朝の源氏將軍への直接的な帰属度が強かつたためと思われるので、この頼朝の猶子説は、胤義の源氏に対する愛着を説明はしてくれるだろう。

三浦胤義について記すものは、「承久記」を除けば、「吾妻鏡」ぐらいである。承久の乱以前の胤義の動きを「吾妻鏡」に

見ると、元久二年（一一〇五）六月二十二日、北条時政が畠山重忠を討つた「畠山事件」の北条軍の中に、その名が現れるのが最初である。続いて、建暦三年（一一一三）五月二日、三浦の一族和田義盛を、いったんは味方の約束をしながら直前で返つて討ち、後々非難を浴びた「和田合戦」に、兄義村とともにその名を連ねている。この二つの事件以外の胤義は、たとえば建暦三年正月の將軍実朝鶴岡八幡宮参拜にともなう宍飯の役を勤めたり、同年八月二十日には將軍の新御所移徙の隨兵となつたというような、將軍の御出に従つた記事がほとんどである。その中で建保六年（一一一八）三月、実朝が左近大将に任じられ、その勅使中原重繼に鞍馬三疋と砂金百両を遺わす役を胤義が拝命した件は、彼が信任されていたことを窺わせる。

『吾妻鏡』の胤義の記事の内、他と趣を異にしているものは建暦三年十一月五日の、

丑の刻、御所の辺騒動す。ただし時刻を經ずして静謐す。

これ三浦平九郎右衛門尉胤義、女事によつて鬪乱を起すの間、かの一族等にはかに馳せ候ずるが故なり。

という「女事」に端を發した胤義の乱鬪事件である。その後この事件は發展しなかつたらしく、関連する記事は記載されていないので事件の内容は不明としかいえないが、「承久記」

によれば承久の乱で後鳥羽院の側についたのも、いわば「女事」からで、その意味からも興味深い。

さて、胤義が承久の乱以前に「吾妻鏡」に登場する最後の記事は、建保六年六月二十七日の將軍実朝の大將拝賀の鶴岡参拝に衛府として伺候した折のものである。この半年後、建保七年正月二十七日、今度は実朝が右大臣拝賀のため鶴岡に参拝、公暁に暗殺されることになるのであるが、その時はどうした訳か胤義は実朝の行列に加わっていない。この時の随兵は「三徳を兼備する者」と定められていた。曰く「譜代の勇士、弓馬の遠者、容儀神妙の者」という条件であった。だから「この御拝賀は関東無双の暗の儀にして、ほとほと千歳一遇といひつべきか。今度随兵に加へられれば、子孫永く武名を相続せんゆゑ、本懐至極なり」と意識された程のものであった。三浦の一族では三浦小太郎時村が随兵十人の中選ばれているだけで、義村も随兵はもとより、前駆にも名を連ねていないから、胤義一人が外れたということではなからう。

この二年半後、承久の乱で胤義は後鳥羽院側の武将として再び「吾妻鏡」に登場してくるのである。慈光寺本「承久記」には、兄義村の乱開始時の言葉として「平九郎ガ、今年三年都ニキテ」「平判官胤義ガ今年三年京住シテ」とあるが、承久三年

から遡って三年とは、建保七年（承久元年）であるから、まさに実朝暗殺事件が胤義の地から離れさせた原因になったと見做してよからう。この実朝暗殺事件から承久の乱までの間に起こった出来事で、胤義に最も関わりの深いものといえば、將軍決定問題である。実朝は子がなかったから、生前から母政子は継嗣については心配しており、建保六年二月の熊野詣での折にも京都に立ち寄り、後鳥羽院の乳母卿二位兼子と將軍後継者の相談をしている。まして実朝が殺された今、すぐに都に使者が発ち、後鳥羽院の皇子雅成親王・頼仁親王のいずれかを將軍として東下されたい旨申し入れた。使者は藤原行光であったが、院は親王を將軍にすると日本を二分することになると拒絶、行光は空しく鎌倉へ戻った。その時、行光は京都で出家していた禅暁を鎌倉へ伴っている。「光台院御室記」には、

（承久元年）二月廿六日、前信濃守行光入洛す。閏二月五日、禅暁關梨故頼家を召し具し下向す。

これは親王將軍不成立の場合の幕府側の窮余の策だったと思われる。この時点では禅暁の將軍就任は可能性があったのである。前述したように、二代將軍頼家には四人の男子がいたが、

○建仁三年（一一〇三）九月二日

比企氏の乱により長男一幡丸（六歳）殺害さる。（自書

説あり)

○建保二年(一二二四)十一月二十五日

和田氏の乱により三男栄実(十四歳)殺害さる。

○建保七年(一二一九)一月二十七日

実朝暗殺の犯人として次男公暁(二十歳)殺害さる。

と、三人までが殺され、頼朝の弟阿野全成の遺児阿野冠者時元も実朝暗殺事件の一月ほど後の建保七年二月二十二日、駿河で北条軍に討たれており、僅かに禪暁ひとり頼朝の血筋を保つ人物として、將軍の有力候補であった。

鎌倉幕府の親王將軍東下の要請を断つた後鳥羽院は、三月八日、実朝の弔問を兼て藤原忠綱を関東に遣わし、寵愛の白拍子亀菊に与えた長江・倉橋の荘の地頭改易を要求してきた。「承久記」諸本が乱の原因として記す事件である。これを拒絶した義時は、弟時房に一千騎の軍勢を付けて上洛させ、再度將軍の東下を求めた。この結果、院は摂関家からの將軍擁立は認め、時に二歳の藤原道家の子頼経が將軍と決まった。院が義時に妥協するかたちで將軍が決まった以上は、もう禪暁は不要であり、後々厄介の種にもなりかねない存在でもあった。義時は翌承久二年四月、「仁和寺御日次記」に記されているとおり、京都東山の辺で禪暁を切り捨てた。しかも、幕府が藤原將軍を受け入

れた時の状況を、「愚管抄」は、

其御返事ニ、次々ノタゞノ人ハ関白摂政ノ子ナリトモ申サ
ンニシタガフベシナド云タゞノ御詞ノアリケル。コレニト
リツキテ、又モトヨリ義村ガ思ヨリテ、コノ上ニハ何カ候
マジ。左大臣ノ御子ノ三位ノ少將殿ヲノボリテムカヘマイ
ラセ候ナント云ケリ。

と書いて、この幕府側の決断が三浦義村の言によつて促されたとしている。

慈光寺本「承久記」には、殺された禪暁の母が後に三浦胤義の妻になり、この妻の嘆きに深く同情して、胤義は後鳥羽院の側に付いたと書かれているのだが、禪暁処刑が「愚管抄」のいうとおり兄義村の言に起因するものであるなら、胤義が院方に走つた心情もよく分かる。これら一連の動向を確実に裏付ける資料は少ないものの、胤義の行動をあながち慈光寺本「承久記」の虚構とばかりはいきれない整合性を持つているものと思う。胤義は実朝暗殺直後に上京し、僧籍にいた禪暁に近付き、源家の血筋を引く禪暁に將軍の期待をかけていたが、北条義時と兄義村のためにその夢も断たれた。禪暁処刑の後はその母を妻として、一年後、後鳥羽院に誘われて立つたものと思われる。慈光寺本によると、兄義村とは以前から仲が悪かつたらしく、

軍に破れた胤義が最後の決戦で兄に向つて、

アレハ駿河殿ノオハスルカ。ソニテマシマサバ、我ヲバ誰
トカ御覽ズル。平（九郎）判官胤義ナリ。サテモ鎌倉ニテ
世ニモ有ベカリシニ、和殿ノウラメシク当リ給シ口惜サニ、
都ニ登リ院ニメサレテ、謀反オコシテ候ナリ。和殿ヲ頼ン
デ、此度申合文一紙ヲモ下シケル、胤義思レバ口惜ヤ。現
在和殿ハ榎太夫ガ方人ニテ、和田左衛門ガ媒シテ、伯父ヲ
失程ノ人ヲ、今唯人ガマシク、アレニテ自害セント思ツレ
ドモ、和殿ニ現参セントテ参テ候ナリ。

と、義村に「ウラメシク当」たられたことと、「伯父（和田義
盛は従兄にあたる）」を殺した和田合戦に批判的であることが
述べられている。一方、義村も弟の手紙を見て、

恐シノ平九郎ガ、今年三年都ニキテ云ヲコセタル事ヨ。一
年和田左衛門ガ起シタリシ謀反ニハ、遙ニ勝サリタリ。加
様ノ事ハ二目共見ジ。

といい、また、北条義時に向かつて、

平判官胤義ガ今年三年京住シテ下タル状御覽ゼヨ。一年和
田左衛門ガ謀反ノ時、和殿ニ義村ガ中謀シタリトテ余所ノ
誹謗ハ有シカドモ、若ヨリ互ニ変改アラジト約束申テ候ヘ
バ、角モ申候ナリ。…（後鳥羽院の院宣が）披露有ツル者

ナラバ、和殿ト義村トヲ敵ト思ハヌ者ハヨモアラジ。

といつて、北条氏との連帯を強調し、それに刃向かつた和田一
族の坑戦を「謀反」と決め付けている。義村自身、和田合戦に
世間の批判があることは認めているが、慈光寺本は義村を何よ
りも北条氏と運命共同体的意識の持ち主として描き、胤義と対
置している。これは後鳥羽院と義時を対置して描くことに代表
される慈光寺本の基本構図である。

三

次に、乱における三浦胤義の役割を、慈光寺本「承久記」は
どのように位置付けているか、前田家本との比較で見えておきた
い。

最初にも述べたとおり、慈光寺本の胤義の登場は能登守藤原
秀康が後鳥羽院に推挙したことに始まった。この後、秀康と胤
義二人の関係は一貫して秀康優位で展開する。乱に到るまでの
段階では秀康が胤義に命じることがあつても、決して対等とは
いえない。例示すると、

○去テ秀康ハ院宣蒙リ、三浦判官胤義ヲ請ジ寄セ、軍ノ會
議始ケリ。（京都守護の伊賀光季を討つ計画を立つ）

○十五日ノ朝ニ成ケレバ、能登守秀康ハ院宣ニテ伊賀判官ヲ三度マデコソ召タリケレ。(伊賀光季の動きを確かめる)

○去程ニ能登守ハ御所ニ參、軍ノ次第申上ケレバ、十善ノ君モ御尋有ケリ。(伊賀光季追討成功の報告)

○又十善ノ君ノ宣旨ノ成様ハ、「秀康是ヲ承レ。武田・小笠原・小山左衛門…、此等両三人ガ許ヘハ賤遣ベシ。」トゾ仰下サル。秀康宣旨ヲ蒙テ、按察中納言光親卿ソ書下サレケル。(義時追討の院宣を主な御家人宛てに出す)

○能登守ノ申サレケルハ、「何ゾノ押松ガ、是程ノ晴ニ南庭ニウツブシタル奇恠サヨ。鎌倉ノ様、起上リテ有ノ儘ニ申セ。押松」トゾ仰ラレケル。(院宣の使者押松が戻り院の御前で鎌倉の様子を尋ねる)

○能登守秀康ハ、此宣旨ヲ蒙リ、手々ヲ汰テ分ラレケリ。(鎌倉の軍勢を防ぐための手分けをする)

とといったように「実に重要な局面において、秀康は必ずといてよほどに登場し」ており、「秀康が軍事の要」として慈光寺本には描かれている。これに対して胤義は、秀康に意見を求められたり、伊賀光季追討の第一陣として差し向けられたりしているが、秀康の麾下に属する扱いである。

一方、前田家本での胤義の扱いを見ると、その登場の最初は秀康が胤義の本心を探るために密談するところであるが、秀康の報告を聞いて後鳥羽院が今度は直々に胤義を御所に呼び出し、

○一院、胤義を小坪にめして、御殿を捲あげさせ給て、密々に直に御物語あり。胤義が申状さきのごとし。頗報感をすゝめ奉る。

また、伊賀光季をどうするか、院はこれも直々に、

○又胤義をめして、伊賀判官光季・少輔入道親広をば打ベきか、又召籠ベきかと仰合られけり。

と意見を求めている。さらに不審に思つた光季が院の召しに応じないので、

○光季めははや心得てけり。早く追討すべし。今日は日暮ぬ。明日向ベきよし胤義申て、御所を守護し奉りぬ。

のように、慈光寺本には見えない胤義と後鳥羽院との直接的なつながりを示す記事が現われてくる。

また、光季を討つた後、

○胤義・親広已下、御所へ参り合戦の次第を奏す。

というように慈光寺本では藤原秀康の行為であつたものが、前田家本には胤義にとつて代わられている。それだけでなく、「軍事の要」も胤義に移っている。

○(院は)胤義・広綱以下兵共、各存之旨を可申由仰下さ
れり。

○義時、大いにいかりて、いはれなし。今一日も延るなら
ば、三浦平九郎判官を先として討手むかひなんず。

と、後鳥羽院からも義時から認識される者となっている。勿
論、秀康は総奉行として胤義の上にいるから、「六月八日の暁、
秀康・胤義已下御所へ参て、…」と出てくることはあるが、そ
の数も少く役割も軽い。

さらに、慈光寺本には見られないもので、注目しておきたい
ものとして、

○後白河法皇の御時、…義仲を追討せんとせられしが、木
曾愼を含み法住寺殿へ向て攻奉る。御方の軍、一時の内
に破られて君も臣も亡び給ひき。今又胤義・広綱が讒に
より、義時を攻らるべきか。

○二位殿仰られるは、一院こそ長政・尊長・長季・胤義
等が讒言に付せ給て、義時を討たんとて、先光季うたれ
て候なれ。

○詞を以て義時申されけるは、…然を尊長・胤義等が讒言
に付せまし／＼て、率爾に宣旨を下され、既に誤りなき
に朝敵とまかり成候条、尤不便之至也。

のような記事がある。「讒臣の言」に後鳥羽院が付いたのが乱
の原因だとし、その讒臣につねに胤義の名が入っているのでは
ある。「吾妻鏡」も承久三年五月十九日の北条政子の演説の中に
「而るに今逆臣の讒に依りて、非義の給旨を下さる。名を惜し
む族は、早く秀康・胤義等を討取り、三代將軍の遺跡を全うす
べし。」と「逆臣の讒」のことが出ており、「吾妻鏡」のもと
の資料となった「六代勝事記」にも「不忠の讒臣、天のせめを
はからず、非義の武芸にほこりて追討の宣旨申くだせり。…恩
をしり名をおしまむ人、秀康・胤義をめしとりて、家を失はず
名を立てん事をおもはずや。」と、乱の原因を「不忠の讒臣」
の所為にし、その中に胤義も入っている表現なのである。「六
代勝事記」は乱後、あまり時間を隔てずに書かれたものである
から、慈光寺本と近い頃の成立と考えられる。「六代勝事記」
の作者は藤原隆忠かとされており、作者自身は乱の責任を後鳥
羽院にあると断じているが、この「不忠の讒臣」の語は、政子
の政治的配慮とも考えられ、作者は伝聞を記しているものであ
らうから、当時の一般的とらえ方を代表しているものと見てよか
らう。これに対して、慈光寺本はこの乱を始めからまったく後
鳥羽院自身の意志によるもの、後鳥羽院の個性によるものとの
とらえ方をしている。逆臣の讒言が乱を引き起こしたなどとは

毫も考えておらず、このようなところにも慈光寺本の特色があるのだが、前田家本はこういう慈光寺本の世界を天皇に対する常識的判断によって切り崩しているといえようか。いずれにせよ、前田家本は三浦胤義の存在を慈光寺本に比べ大きなものに仕立てているのである。

四

三浦胤義の記事で慈光寺本に見えず、前田家本にいたって現われるものが二つある。一つは胤義最期の場面である。慈光寺本は、戦い破れ、後鳥羽院から門前払いされた胤義は兄義村を東寺に待ち受け、最後の軍を挑む。義村は「シレ者ニカケ合テ無益ナリ」と相手にしない。胤義も「帝王ニ向マイラセテ軍ニ討勝、世ニアラズル人ヲ討取テハ、親ノ孝養ヲモ誰カハスベキ」と思い諦めて、木島へ落ちる。その後、「木島ニテ十五日ノ辰ノ時ニ、平判官父子自害シテコソ失ニケレ。アハレ武士ナリツル人ヲト、オシマヌ人モ無リケリ。」と結び、巻末近くで「駿河次郎ニ仰付テ、木島ヨリ平判官ノ自害ノ首ヲソ召出ス。」と記して、胤義の記事を終える。

これに対し前田家本は流布本とも多少の違いを見せながら、以

下のように展開する。

①院に門前払いを食った胤義は、兄義村が通るであろう東寺に籠もり、一族佐原又太郎に攻められ、かなわず落ちる。

②胤義は太郎兵衛を連れて、東山へ落ちるが次郎兵衛は六波羅の蓮華王院で自害した。

③胤義は東山から妻子のいる太秦へ向かうが敵が多く、木島神社の境内に「車の傍に立て、女車のよしにて木造の人丸を」乗せて隠れる。

④そこへ胤義の昔の郎等、藤四郎入道が通りかかり、敵が充滿していることや汚名を残すべきでないことを説いて自害を勧める。

⑤胤義は「形見共送り」、兄義村に恨み言を言伝て、太郎兵衛の後を追って切腹し、首を義村の許へ届けさせる。

⑥義村は弟と甥の首を抱えて泣き、僧に申わせ、妻子を呼んで慰めた。

『吾妻鏡』では承久三年六月十五日条に胤義最期が載る。①の記事は「胤義は東寺の門内に引き籠るのところ、東士次第に入浴し、胤義と三浦・佐原の輩と合戦すること数反にして、両方の郎従多くもつて戦死すと云々」。⑤に当たるのは「申の刻、

胤義父子、西山木島において自殺す。廷尉の郎従その首を取り、太奏の宅に持ち向ふ。義村これを尋ね取り、武州の館に送ると云々。『吾妻鏡』と共通するのは以上の①⑤の二つだけである。②の兵衛次郎のことは、『系図纂要』の胤義の次男「兼義」の注に「二郎兵衛、於六波羅蓮華王院」と記されているのが管見唯一のものである。

③④については「承久記」以外に資料を見出すことはできず、不明な点が多い。③で木島神社に身を潜めた胤義たちが、女車を装うために乗せた「木造の人丸」とはいかなるものなのか。流布本もこの点が不明だったからか、「東山なる所、故畠山六郎最後に、人丸と云者の許へ行て」「父子二人と人丸三人、下簾懸たる女車に乗具して」「社の中に父子隠れ居たり。人丸をば車に乗て置ぬ。」と、人丸を人名としている。

④に登場する藤四郎入道は、「高野にこもりたるが、軍をも見、主の行衛をもみんと」上京し、偶然胤義父子に出会う。西山にいる妻子に一目会いたいという胤義に、「妻子のことを心にかけて、女車にて落行を、車より引出されて討れたるといはれさせ給はんこそ、口おしく候へ。昔より三浦一門に疵やは候。入道知識申べし。此社にて御自害候へかし」と説得し、胤義もこれに従う。⑤で胤義は子を先に自害させ、形見を送り、

「度々の合戦に、三浦の一族を亡し給ふこそ、人唇をかへし候しに、胤義一家をさへ亡し給ひ候へば、弥人の申さん所こそ、還て痛はしく候へ。唯今思ひ合せ給はんずらん」のことばを兄義村に伝えるよう藤四郎入道に言い置く。

高野山の入道が、妻子との再会をはかる敗者に自害を勧める話は、『平家物語』の平維盛と同趣であり、自分を死に追い込む一族の者にその末路を予言するのは、『保元物語』の源為義の子乙若が、長兄義朝に恨み言を言い送った話に似ている。

これらのことは、慈光寺本になく前田家本等に載る胤義関連の二番目の後日譚にも共通する。それは乱後、三浦にいた胤義の子供たちが処刑された話である。慈光寺本の本文は、本稿の初めに引用し傍線を付したように、胤義には「三浦二九・七・五ニナル子共三人」がいたと明示している。この「三人ノ子供」の命と引き替えに兄義村に義時殺書を勧めたのであるが、軍敗れた後のこの子たちの運命については何ら触れることがない。ところが前田家本では、三浦の矢部の祖母に匿われていた胤義の子供は十一を頭に五人、「権大夫」義時が小川十郎を使者として呼び出すのである。矢部の祖母は十一歳の子を残し、九・七・五・三歳の四人を差し出す。咎められて、祖母は五人とも切られるならば自分を殺せと言い、小川も、「げには奉公

の駿河守にも母也」と思い、これを許したとしている。

この処刑譚も「保元物語」の「義朝幼少の弟悉く失はる事」に近似しており、むしろその影響下に成ったものと考えられている。¹⁰三浦胤義の子供たちが処刑されたことを証する資料は、これもまた確実なものはない。ただ胤義の末子として「系図纂要」には「女五人」、「諸家系図纂」には「少子五人」とある。さらに「佐野本系図」には胤義の三男「義有」に「童名豊王丸」とあり、注記に「或系図云、胤義五男在関東、豊王丸十才、次九才、次七才、次五才、次三才、與其祖母在三浦矢部邑、義村令家士小河十郎殺之、千時祖母既豊王丸、而不出、余皆被殺、以故独得免、不知其終、今考此説、不審、皆赦免歟、」と記されている。「或系図」がどのようなものであったのか不明だが、十一歳の子の名を「豊王丸」とするのは、「承久記」特に流布本と同じで、あるいは系図より「承久記」のほうが先かもしれない。

以上のように胤義にまつわる後日譚は、いづれも不明な点が多く、「保元物語」や「平家物語」をヒントに創作されたものかとも思われるのだが、前掲⑤の「吾妻鏡」の胤義自害の記事に「廷尉（胤義）の郎従その首を取り、太秦の宅に持ち向ふ。」とあつて、この「太秦の宅」はやはり胤義の妻子が住む家の可

能性がある。「吾妻鏡」はこの記事に続いて、「義村これを尋ね取り」と記しているからである。つまり前田家本のように首は義村の許に届けられていないのである。「吾妻鏡」によれば、尋ね取った首を義村は武藏守北条泰時に届けている。また⑥の義村が胤義の首を抱えて泣き、手厚く弔つて、妻子を呼び寄せたという義村像とはやや趣を異にする義村がこの「吾妻鏡」の記事から窺える。この点からも、胤義をめぐる後日譚は、「承久記」の創作とばかりはいえない何らかの伝承をもとにしていく可能性も捨てきれないのである。

三浦の五人（慈光寺本は三人）の子供たちの処刑譚にしても、話の中心は胤義・義村の母「矢部の尼上」であり、彼女は伊東祐親の娘、曾我兄弟の叔母に当たる女性である。子供を引取りにきた小河十郎を初め「権大夫」義時の使者としておきながら、矢部では「奉公の駿河守」と義村の家臣とするような矛盾も、言い伝えられた処刑の話と「保元物語」の影響のズレを示したもので、この処刑譚は鎌倉・三浦あたりの巷間流布の話を採用したものかとも思われる。処刑の地、田越川の流れる逗子市に遺跡が残されているのも、この想像を援ける。

前田家本は胤義の後日譚を物語として膨らませようとはしなかった。話の内から当然持つてもよさそうな宗教的色彩もほと

んどまとしておらず、また悲劇を訴える叙情性にも関心を払っていない。これは胤義関係記事のみのものでなく、前田家本全般にいえることであり、かつて論じたことがある。¹¹したがって前田家本は、たとえ伝承を取り入れるにしても事件的空白を埋める。事実¹²としてしか利用しなかつたといえよう。

胤義像を追ってゆくと慈光寺本と前田家本との間の落差は大きい。実戦指揮の侍大将的存在であつた慈光寺本から後鳥羽院をそそのかす讒臣へと変化しているのが前田家本である。しかも慈光寺本はその成立時の時代相を反映しているというだけでは済ませえない特殊性を持つており、また前田家本にはその製作の目的に沿つた胤義の役割変更が施されていると考えられるのだが、それらの問題はさらに多角的な検討が必要であるので、後日を期すことにしたい。

注1 「真名本 曾我物語1」（東洋文庫・平凡社）の読み下し文による。

2 「全釈 吾妻鏡」（新人物往来社）の説み下し文による。

3 「佐野本系図」「諸家系図纂」は、『大日本史料』第四編之十六所収。

4 「続群書類従」第六輯上所収の「三浦系図」には、「為頼卿猶

子也」とあるが、「為頼朝卿猶子也」の誤りか。「系図纂要」は「諸家系図纂」と同じく頼朝の猶子とする。

5 平泉隆房氏「吾妻鏡」源実朝暗殺記事について（『皇学館論叢』23—2）に実朝暗殺時の供奉行列次第に義村の名がないことにふれ、「供奉の行列に加わらなくとも直接鶴岡宮で参会した例が『吾妻鏡』建保六年七月八日条に見え（義時の例だが）また同書同年六月二十七日条には、行列に加わらない御家人は宮中（鶴岡宮の中）及び路次を管固した例が明記されている」とあるので、胤義もそのような役を勤めていたものかと思われる。

6 上横手雅敬氏「鎌倉時代政治史研究」（吉川弘文館）78頁。

7 「国史大系」は「義村」を「義時」の誤りかとするが、「愚管抄」には他のところに数箇所「義村」の名が出るので、誤りと断じ切れない。

8 平岡豊氏「藤原秀康について」（『日本歴史』平3・5）

9 弓削繁氏「内閣文庫蔵六代勝事記」（和泉書院）解説。

10 兵藤裕巳氏「承久記改竄本系の成立と保元物語」（『軍記と語り物』14）

11 「軍記物語の真話—承久記の場合—」（『オルピス』5）